

嘉村 礒多

山口市
(1897～1933)



【著作】

『途上』（昭和7・江川書房）
『嘉村礒多全集』全三巻（昭和9・白水社）
『嘉村礒多全集』上・下巻（昭和40・南雲堂校楓社）
ほか

昭和三年（一九二八）一月号の『不同調』に掲載の「業苦」が注目され、嘉村礒多は宿願であった作家への道を歩みはじめる。昭和七年（一九三二）二月号の『中央公論』に発表した「途上」によって作家としての地位を確立。まさに身命を賭しての励みであった。処女作「業苦」は妻子を置き去り、勤め先の女学校の裁縫助手と出奔した罪を遁れようのない宿業として表白した作品である。

嘉村の最初の作品が「業苦」であったことは、いみじくも彼の生涯を、その文学を象徴するものであったと云っても過言ではあるまい。彼はものごころつく頃から自らを羞ずべきものとして心を痛めた。尋常でないその傷みの底にどうしようもない本源の苦悩をみる思いがする。

山口中学校を中退した彼は、親鸞の教えに救いを求め、深く傾倒。―触ればう人毎へ、闇をおくり、影を投げ、傷め損する、悪性さらにやめがたい自分―をつきつめていく。

そうした自我を徹底して語りつづけた彼は、わずか六年の作家生活で病没。他に類を見ない「私小説の極北」と位置付けられた。

広津和郎は嘉村の文学について次のように称揚している。

―たとひ彼が小粒であつても、その眼を向けた人生の視野は狭くとも、併しこんなに徹頭徹尾嘉村礒多であり切つたことは、換言すれば、一つのゆるぎもしない『真実』であり切つたことは、大したことである。たとひ彼の傍に誰がゐても、例えば大トルストイがゐても、小なりと雖も彼の光は消えはしない―と。

（文・多田美千代）



「十三人倶楽部」の会合

尾崎士郎
佐左木俊郎
浅原六朗
中村武羅夫
嘉村礒多
飯島正
久野豊彦
吉行エイスケ
加藤武雄
川端康成
岡田三郎
楠崎勤
龍胆寺雄

（注）この写真には「十三人倶楽部」のメンバーの一人である翁久允の姿が見えず、代りに吉行エイスケが写っている。

提供・日本近代文学館

わが故郷を語る

私の故郷、周防仁保村は、中国山脈の西の端の、山と山とに囲れた上ヶ山といふ字が、私の真の故郷である。生れた土地、育つた土地、土地の五穀―そこには、深い深い愛着、永久に切つて切れない縁である。人丸神社、葉師堂、家向うの霊神の祠、祠の背戸山には白百合の花も咲く。その近くに墓地がある。私の兄や弟や妹が眠つてゐて、三つの地藏さんが合唱してござる。私は都会で死にたくない。異郷の土にこの骨を埋めてはならない。それは私の衷心の願である。あのお地藏さんのそばへ埋る日 pensando このころ躍る！

「上ヶ山」の里（昭和六年十一月・『新文芸日記』）



嘉村礒多生家（山口市仁保）

嘉村礒多年譜

明治30（一八九七年）	明治44（一九一二年）	大正3（一九一四年）	大正6（一九一七年）	大正7（一九一八年）	大正8（一九一九年）	大正9（一九二〇年）	大正10（一九二一年）	大正11（一九二二年）	大正12（一九二三年）	大正13（一九二四年）	昭和8（一九三三年）	昭和9（一九三四年）	昭和10（一九三五年）	昭和11（一九三六年）	昭和12（一九三七年）	昭和13（一九三八年）	昭和14（一九三九年）	昭和15（一九四〇年）	昭和16（一九四一年）	昭和17（一九四二年）	昭和18（一九四三年）	昭和19（一九四四年）	昭和20（一九四五年）	昭和21（一九四六年）	昭和22（一九四七年）	昭和23（一九四八年）	昭和24（一九四九年）	昭和25（一九五〇年）	昭和26（一九五一年）	昭和27（一九五二年）	昭和28（一九五三年）	昭和29（一九五四年）	昭和30（一九五五年）	昭和31（一九五六年）	昭和32（一九五七年）	昭和33（一九五八年）	昭和34（一九五九年）	昭和35（一九六〇年）	昭和36（一九六一年）	昭和37（一九六二年）	昭和38（一九六三年）	昭和39（一九六四年）	昭和40（一九六五年）	昭和41（一九六六年）	昭和42（一九六七年）	昭和43（一九六八年）	昭和44（一九六九年）	昭和45（一九七〇年）	昭和46（一九七一年）	昭和47（一九七二年）	昭和48（一九七三年）	昭和49（一九七四年）	昭和50（一九七五年）	昭和51（一九七六年）	昭和52（一九七七年）	昭和53（一九七八年）	昭和54（一九七九年）	昭和55（一九八〇年）	昭和56（一九八一年）	昭和57（一九八二年）	昭和58（一九八三年）	昭和59（一九八四年）	昭和60（一九八五年）	昭和61（一九八六年）	昭和62（一九八七年）	昭和63（一九八八年）	昭和64（一九八九年）	昭和65（一九九〇年）	昭和66（一九九一年）	昭和67（一九九二年）	昭和68（一九九三年）	昭和69（一九九四年）	昭和70（一九九五年）	昭和71（一九九六年）	昭和72（一九九七年）	昭和73（一九九八年）	昭和74（一九九九年）	昭和75（二〇〇〇年）	昭和76（二〇〇一年）	昭和77（二〇〇二年）	昭和78（二〇〇三年）	昭和79（二〇〇四年）	昭和80（二〇〇五年）	昭和81（二〇〇六年）	昭和82（二〇〇七年）	昭和83（二〇〇八年）	昭和84（二〇〇九年）	昭和85（二〇一〇年）	昭和86（二〇一一年）	昭和87（二〇一二年）	昭和88（二〇一三年）	昭和89（二〇一四年）	昭和90（二〇一五年）	昭和91（二〇一六年）	昭和92（二〇一七年）	昭和93（二〇一八年）	昭和94（二〇一九年）	昭和95（二〇二〇年）	昭和96（二〇二一年）	昭和97（二〇二二年）	昭和98（二〇二三年）	昭和99（二〇二四年）	昭和100（二〇二五年）
-------------	-------------	------------	------------	------------	------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	--------------

12月15日、山口県吉敷郡仁保村上郷上ヶ山（現・山口市）に、父若松、母スキの長男として誕生。家は農業・地主。
山口県立山口中学校に入学。蘆花の書に親しむ。
山口中学校を中退し、帰村。人生問題に悩み、秋吉のキリスト者本間俊平に救いを求めたがなじめず、仁保信行寺住職桃林皆違より親鸞の教えを受ける。
徴兵検査を受けたが丙種。10月、仁保村役場に勤める。
夏、藤本静子と結婚。
12月役場を退職し、文学を志す。長男松美誕生。
3月、安倍能成に書信を送る。（書信は大正13年まで38通に及ぶ）
4月上旬。安倍能成・水守亀之助を訪問。水守の紹介で早稲田系同人誌『十三人』の社友となる。
1月、長編小説を脱稿（作品名は「慟哭」・未発見）。2月上旬。年末、家族の同意を得ぬまま長期遊学を決意し、再び上京。
近角常観の求道会館で聴聞。4月、安倍が科長をつとめる法政大学哲学科で聴講。同月、指方龍二らと同人雑誌『黒潮』を創刊。大江礒多のペンネームで初号に「呪はれた子」、2号に「あわれな男」を発表。9月関東大震災に遭い、当分文壇に出ることは不可能と諦め、帰村。信仰に傾倒。『法悦』に宗教随想を次々に発表。秋、『法悦』の同人となる。山口市市中村女学校書記の職を得る傍ら、同校舎生の求道会の講師となる。小川チトセを知る。
4月、チトセと出奔、上京。生活に窮する中、京橋浜町の帝国酒醬油新報社に職を得る。
中村武羅夫主宰の『不同調』事務員兼記者となる。8月、葛西善蔵の「酔狂者の独白」の口述筆記を引き受け、知遇を得る。12月、先妻静子と離婚成立。
1月、「業苦」を『不同調』に発表。7月「崖の下」を同誌に発表し、好評を得る。葛西善蔵逝く。
4月、文芸誌『近代生活』のメンバーに加わり、後、編集に携わる。10月、川端康成・岡田三郎らによる「十三人倶楽部」に加入。
4月、反マルクス主義と芸術擁護を掲げて結成された「新興芸術派倶楽部」に加入。
「文科」の執筆メンバーに加わり、小林秀雄、河上徹太郎、中島健蔵、今日出海らを知る。
元日深更にチトセを伴って帰郷。かねて広津和郎に託していた「途上」が『中央公論』2月号に採用の通知を帰郷中に受ける。作家としての地位確立。
11月30日逝く。戒名「天稟院文賢獨秀居士」

山口市宮野常栄寺に文学碑建立・題字安倍能成、撰文河上徹太郎。生家に生誕碑建立。母校大富小学校跡に文学碑建立。